

特別特集

言語系科目 オンライン座談会

オンライン言語授業を振り返り 課題と可能性を考える

日時：2021年1月21日・22日

参加者

サンブソン・リチャード (全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室員/外国語教育研究センター准教授)

坂本 真一 (全学共通カリキュラム運営センタードイツ語教育研究室主任/外国語教育研究センター准教授)

関 未玲 (全学共通カリキュラム運営センターフランス語教育研究室主任/外国語教育研究センター准教授)

松本 句子 (全学共通カリキュラム運営センタースペイン語教育研究室主任/外国語教育研究センター准教授)

森平 崇文 (全学共通カリキュラム運営センター中国語教育研究室主任/外国語教育研究センター教授)

佐々木 正徳 (全学共通カリキュラム運営センター朝鮮語教育研究室主任/外国語教育研究センター教授)

2020年4月着任当時の多忙な日々

松本 手帳を見ながら思い出してみると、外国語教育研究センターの会議で最初に呼ばれたのが3月30日でした。外国語教育研究センター設置準備室から運営方針について説明があり、設置準備室長から激励もいただきました。すでにその時点でオンライン授業を実施するという通達は届いており、その後はいきなり実務になだれ込むような形でした。皆さん、着任当時のころを覚えていますか？

佐々木 とにかく毎日何かに追われていて、ミスなくこなすことで精一杯だったように思います。あらゆることが初めてだったので、業務の優先順位や難易度がすぐに判断できず、不安があってもそれを解消する術が分からないのがストレスでした。

大変だったのは、連絡手段がほぼメールだけだったことです。複数の方と複数の業務を平行してこなしていたため、大量のメールが送られてきて、どのメールに何が書かれているか分からなくなってしまいました。口頭なら30秒で伝えられるものがメールだと30分とか、すごい時間がかかります。宛名から前置き、そして中身を過不足なく書いて、書いたあとは見直しをして。



サン普森 メールを書く大変さは日本人の先生も感じていたのですね、と少し安心しました (笑)。

森平 私も 2020 年度は、大学関係、教員間でのメールが 1 日にこれまで経験したことのない数になっていたことがとても印象に残っています。目の前の課題をこなすので手一杯で、1 カ月後、半年後のことなどまったく想像がつかず、先の見えない中進んでいったという感じです。

坂本 当初ドイツ語教育研究室の他の先生方をどうサポートしていいのか分からないところがありました。他の先生方との交流がまだ少なく、信頼関係が築けていない状況で、それぞれのパソコンスキルについても未知数でした。

さらには全教員、全学生のインターネットの接続状況が安定しているとも限らないので、他の先生方にも協力していただき、不測の事態をいくつも想定し、授業の進め方の代替案などを考えてもらう必要がありました。そのため、研究室の先生方には授業準備に関して通常以上の負担が生じてしまい、申し訳なく思っています。

関 フランス語は、当初 Google Meet を用いたオンライン授業を想定していましたが、他大学の先生方や出版社の方の情報から、Zoom を用いた授業運営のほうが語学授業には適しているということを知りました。そこで Zoom の機能を使った音声や映像の提示方法、チャットとブレイクアウトルームの活用方法、Zoom 以外にも Blackboard や Google フォームを用いた小テスト作成とその回収方法など、操作方法を調べては試し、試しては調べを繰り返しました。

何としてでも 4 月末の授業開講前に、先生方にご案内できるだけの知識を詰め込まなければならない不安とプレッシャーで、準備期間の前半はすぎました。一つの課題をクリアするために、デスクに向かって何時間も費やしてしまいました。

坂本 私も研究室の運営だけでなく、立教大学の仕組みについても、何も分かっていなかったのが、大変さを感じました。例えば、どのようなツールを使って授業を展開するかは大学によって違うのですが、立教大学の LMS (学習管理システム: Learning Management System) の Blackboard に慣れるまでが大変でした。皆さんはいかがでしたか？



サン普森・リチャード

サン普森 私も昨年まで在籍していた大学では、立教大学の LMS とは違うものを使っていました。概念自体は分かっても違う機能もあるので、まず Blackboard に慣れなくてはなりませんでした。

森平 中国語の教員の中には私自身も含め、これまで Blackboard を利用していない人が多く、学生からの操作に関する質問に返答できない、あるいは予定通り課題をアップ、返却できないなどの問題も生じました。そのため、中国語でも Blackboard を通じた課題の提出方法に関するマニュアルを作成し、履修者と教員で

共有しました。

佐々木 私も、課題の添削は Blackboard を通して行いました。学生への連絡や資料配付は教室での授業だと授業時間に間に合うように準備すればいいのですが、オンライン授業では学生がプリントアウトする時間などを考慮しなければならないため、授業の数日前までに行わなければなりません。常に早め早めに動かねばならないため、教材の内容についてじっくり考える時間が徐々に削られてしまいました。

松本 スペイン語でも Blackboard 上のパワーポイントの課題が開けないとか音が出ないとか、課題に誰かが上書きをしまい答えが書いてあるものがばらまかれてしまうとかいろいろなトラブルがありました。学生からの問い合わせだけでなく、スペイン語の先生方からも多くの問い合わせが寄せられて大変でした。ただ秋学期からは Blackboard に限らず担当者の使いやすい LMS (Google Classroom 等) を併用していただくことにしました。Google Classroom と連動して使える Google フォームで自動採点できる課題を準備し、だいぶ楽になりました。

各研究室の取り組み

サンプソン 英語教育研究室では、各委員会が科目の指導方針やオンライン授業のやり方、オンライン授業を行ううえでのサポート方法などを Web ヘアアップしたりして、先生方全員に案内していました。私が担当する「英語ディスカッション」の授業に向けては、とにかく何か準備をしなければと思い、教科書のリーディングに関する Q&A を学生がオンラインで活用できるように入力して、Blackboard にアップロードしました。きっと他の先生もこれは必要だろうと思い、他の先生方全員が使えるようにファイルを共有しました。

松本 英語教育研究室では、Zoom や Google Meet の使い方をまとめたプレゼンテーションを英語で作って、他のすべての研究室でも使えるように配信していただきました。それはとてもありがたかったですね。

佐々木 朝鮮語教育研究室の場合は、前主任の石坂浩一先生（異文化コミュニケーション学部准教授）が先を読んで行動されていて、私が着任する前からメールで「コロナの関係で授業がどうなるか分からない」と連絡してくださり、3月末か4月はじめごろに最初お会いしたときには「必修に関しては動画を作る」という方針を表明してくださいました。そうしたこともあり、基本的には、私は石坂先生のサポートを行っていました。

坂本 ドイツ語教育研究室では、授業が始まる直前に、教員全員が Zoom を使った授業を体験できるセッションを何回か行い、授業期間が始まったときには、相談会・情報交換会という形で困りごとやその解決法などを共有する場を設けました。そうしてそれぞれの教員が、システムの使い方やオンライン授業のやり方などを少しずつ身に付けることができたためか、春学期後半は必ずしもサポートが必要ではなくなりました。秋学期に入ってからは、比較的それぞれの先生方にお任せして授業を行えるようになったこ

とから、研究室の主任としての負担は減りました。

相談会の目的は、情報交換というところが大きかったのですが、お互いに少しでも親睦を深めるという意味もありました。特に兼任の先生方は大学に来ないとすると、他の先生方との交流がまったくない状態になりかねません。ですから、たとえオンラインであってもお互いの顔を見ながら話せる場が必要だと思ったのです。

関 フランス語教育研究室では、オンライン授業実施に向けて、授業を担当される先生方に Google Meet や Zoom を使った授業をイメージしてもらうために、授業がスタートする前に3日間にわたるオンライン講習会を開きました。

また、全体向けの講習会では「今さらこんなことは聞きづらくて……」といった声も耳にしたので、Zoom で個別にお話しをうかがえる「ヘルプデスク」も開設しました。ヘルプデスクは春学期中計 16 日間、お昼休みに約 1 時間開設し、他大学で授業をしている兼任の先生でも参加しやすいように工夫しました。

講習会や研究室会議のたびに白熱した議論が続きました。先生方も、慣れないオンライン授業のさなか、日々の課題返却と PowerPoint 教材の準備で疲弊されていたと思います。それでも、目の前にいるフランス語を学びたいという学生のために、多くの時間を割いて話し合いを重ねてくださり、本当に頭が下がる思いでした。そのような先生方と職場をとものにすることができたことは、私自身の教員人生において重要なメルクマールとなりました。

森平 中国語教育研究室では春学期、学生へできる限り均一な授業内容を提供するために、1,500 人いる 1 年次生の履修者を 6 グループに分け、専任教員と教育講師の 6 人でリアルタイムのオンライン授業を行うことに決めました。リアルタイムのオンライン授業を担当しない兼任の先生には、担当するクラスの提出課題（毎週 2 回）の採点と、授業内容に関する学生からの質問への対応を分担していただきました。

中国語は 1 回目の授業が 4 月 28 日にありましたが、その前に一度、模擬授業を Zoom を使って行いました。1 回目の授業が終わったあともオンライン上で集まり、それぞれの授業に関する感想などを話し合いました。1 回目の授業がうまくできているかどうかを、教わる側の視点で確認するためにそのクラスを担当している兼任の先生方何人かに学生として参加いただき、感想を聞くこともしました。

松本 スペイン語教育研究室は、オンデマンド授業用の動画（共通教材）や課題を作成し、各教員へ配付しました。4 月 7 日に研究室で最初の会議があり、オンライン授業をどうやっていこうかという話し合いをしたと記憶しています。その後は、オンラインで連絡が取れる先生方とほぼ毎日連絡を取り合って授業方針を考えていきました。アイデアはいろいろと出のですが、実際にどう運営していくかなかなか決まりませんでした。ようやく 30 分の動画を作成して授業内で流すことが決まったのはいいのですが、動画作成は実際に授業をするよりも数倍の時間や労力を要するものでした。最初の授業まで本当に時間がなく、実質 2 週間で準備をして、授業に突入した感じです。

オンライン授業の課題： 教員と学生、学生同士のコミュニケーションを大切にしたい

サンプソン 授業のときにコミュニケーションをとった相手と「もっと話したい」と思えば、授業のあとに「一緒にランチ食べない？」などと声をかけて友だちになっていきますが、そうした時間がオンラインでは持てません。学生にとっては友だちを作る時間が少なくて本当に大変だったと思いますね。

春学期の英語ディスカッション授業の最終回に、授業の内容を振り返って感想を述べあっているとき、ある学生が「春学期ではこの授業のみんなと一番よく話したけれど、先生が Zoom の画面を閉じたらみんな消えちゃう。このあと会えなくなるのは寂しいので LINE を交換したい」と言っていました。授業中にこうした発言をするほど、友だちを作りたい気持ちが強かったのだなと思いました。

佐々木 サンプソン先生がおっしゃるように、学生同士のコミュニケーションは大切ですよ。オンライン授業になってみて、授業前後にする何気ない雑談がすごく大事だったのだなあと改めて思いました。授業前後には学生同士のやりとりだけでなく、教員に話しかけてくる学生もいます。オンライン授業になってから、人間関係とはそうしたちょっとした関わり合いの積み重ねでできていくものなのだ、という発見がありました。秋学期のグループワークでは、なるべく細かく少人数でグループ分けをして毎回違う人と組ませるようにしたり、授業時間内で終わらない課題を出して、グループワークが終わる3分前くらいに「課題が終わらなかったグループは LINE 交換などをしてお互いに連絡を取り合えるようにしておいてね」という指示を出して学生同士の交流を促したことはありました。

松本 私は「今週1週間で一番楽しかったことは何ですか？」など毎回テーマを決めて学生一人ひとりに名簿順に話をしてもらった時間を作りました。40人くらいのクラスなので「短く一言でいいから」と。そうすると「この学生は音楽が好きなのだ」とか、「スポーツが好きなのだ」とか、それぞれの性格が分かってくるので、学生同士も自然と仲良くなるんですね。そんなことをしていたら、こちらが心配しなくても、ブレイクアウトルーム中に学生たちは勝手に連絡先を交換していました。



松本 旬子

坂本 ドイツ語の授業では、教科書の問題をグループのメンバーと一緒に解いていくという活動を多く取り入れたのですが、グループ内で話し合いをせずに自分一人で問題を解き、答え合わせのときだけグループで発言するという学生たちも結構いました。こちらとしては、グループの中で「これってどうかな?」「それは違うんじゃない?」などのやり取りを促したいという意図があったのですが、学生たちにはなかなか伝わらな

かったようでした。答え合わせをしたあとでも、グループの中で話し続けていていいのですが、その後は一切無言という状況になっていたのも気になりました（笑）。こちらから学生間の雑談を促すのもなかなか難しいなと感じましたね。



森平 崇文

森平 中国語では秋学期は各科目担当者がオンライン授業を担当しました。私のクラスにおけるグループワークでは、なるべく課題は少なめにして、残った時間は雑談をしてくださいと促したこともありました。言語Bの1年次生の授業で大切なのは、言語を学ぶことだけではなく、知り合いを作ってコミュニケーションをとるということだと思います。それがオンラインだとやりにくいという部分はあるかもしれません。よりよいコミュニケーションを促すために私たち教員にできることは、グループワークの中で、参加する学生の雰

囲気やグループの様子をその都度見ながら、交流が活発になるように環境を微調整していくことなのかなと思います。例えば私が担当したクラスでは、1回の授業でグループワークを1、2回行いますが、なるべく組む相手を変えてみようとか、今日は固定でやってみようとかいろいろと試してみました。3、4人で組んで行うグループワークでは、その中の1人でも乗り気のない学生がいると全体の士気が下がってしまうので、ペアワークを中心にしたこともあります。ペアワークなら全員が参加せざるを得ず、傍観者になる人が出ないのでいいかと思ったのですが、それでもペアになった相手とコミュニケーションをとろうとしない学生もいました。こうしたことは正解がなかなか見出せないものなので、これからも引き続きいろいろと試していきたいと思っています。

坂本 今、森平先生のお話をお聞きし、やはり1年次生の学生たちはまだ高校を卒業したばかりの18、19歳なのだと改めて感じました。受けてきた教育もみんなバラバラですし、コミュニケーション能力や授業に向かう姿勢など、基本的な部分を統一化するのは難しいのかなと思います。

そうしたさまざまな学生たちのために、1年次生の必修の言語の授業がどのように貢献できるのかを考える必要があるのかもしれませんが。おそらく3、4年次生になったとき、特に就職活動をしていくうえではグループワークに求められるスキルが必要になってくることは確かです。そこをひとつの目標とするなら、その練習を外国語の授業の中で少しでも多く行うことに、もしかしたら意義があるのかなという気がします。グループワークに取り組むうえでの正しい姿を求めるより「最初はできなくても少しずつやってみましょう」というような気軽な感じで接していくほうが、学生もリラックスできますし、発言しやすい環境になるのかなと思いました。

サンブソン 言語科目の授業では、話しやすい雰囲気づくりは重要だと思います。コミュニケーションメインの授業では、教員側も積極的にコミュニケーションを取る姿勢を示さないといけないと思います。

私はオンライン授業を重ねていく中で、オンライン上のコミュニケーションでは表情が大切だと気付きました。意識的にたくさん笑顔を作ることですよね。でも教員だけが微笑んで、画面の向こうの学生たちが微笑んでいなければ、こちらもそのうち自然に笑顔を作らなくなってしまうものです。教員だけではなく学生も微笑んでくれるのが理想的です。

私の授業では、運よく、学生も、私も自然に笑顔が出るような場面がたくさんありましたが、オンライン授業では常に自分の顔が見えるので、たまにポーッとした表情になっていると「笑顔を作らないと！」という気持ちになります。これは教室での授業ではないことですね。

松本 分かります。私も画面に映っている自分の顔を見て「あ、いけない！ すごく怖い顔になっている」と思って、ちょっと微笑むようにしていましたね。

私は早く Zoom に入ってくれる学生がいれば雑談もします。私の授業は結構厳しくて、ものすごいスピードで進めるのですが、緊張感のある時間とゆるやかな雑談の時間とのメリハリをつけると、学生からあまり文句も出ないと思います。

サンプソン オンライン授業では学生はカメラをオンにするのかオフにするのかという問題もあります。

オンライン授業でカメラをオフにするのは何か顔を見せたくない個人的な理由があるかもしれませんが、どこまで注意していいか迷ってしまいます。

秋学期の英語ディベートの授業は Zoom で行いました。ディベートは2チームで行うもので、相手の用意してきた話を聞いてそれに対して反論するというものです。本来なら教室の前に2チームが出てみんなの前でディベートしますが、オンラインでは顔だけを画面に映して行います。でもそのとき顔の全面を映さず、おでこから上だけを映す学生や、顔が見えないほど画面全体が暗い学生もいました。

ディベートでは、台本を見ないで話すことや、相手とアイコンタクトを取ることも重要なチェックポイントになりますが、そうした部分はオンラインだとチェックできません。まったくアイコンタクトをとらなかったり、顔をきちんと映さなかったりするのは最低限避けたいと考え、フィードバックの時間に「ディベートは、プレゼンテーションをするときと同じように、自分の姿をちゃんと画面に映して相手によりよく伝えようという気持ちでやりましょうね」と全員に呼びかけました。

坂本 ドイツ語の授業では、学生の大半がカメラをオフにして授業を受けていたようです。授業を受ける側からしたら、カメラをオフにしても不便はありませんが、授業をする側からするとやはりやりにくいですよね。「学生に向けて質問したときリアクションがないとやりにくい」という声はドイツ語の先生方からも上がっていました。

ドイツ語の研究室では教員側がやり方を変えるしかないという結論になり、顔は出さなくてもいい（口頭で質問しなくてもいい）ので、質問はチャットで積極的にしてもらおうように学生をお願いすることにしました。18、19歳の学生にとっては、大勢の前で顔を出した状態で質問するのに抵抗があるのは理解できるので、どんな形であれ質問

さえしてくれればいいと思うところもありました。チャットだろうとメールだろうと Blackboard だろうと、教員に直接コミュニケーションを取る方法はいろいろとあるので、どんなツールを使ってもいいから質問は積極的に出してほしいと思っています。

関 私は、教員側の教える熱量というのは、残念ながら 100% は画面越しには伝導しないように感じています。学生側の環境は不揃いで、カフェからスマホを使って授業に参加する学生もいますし、移動中に Zoom にアクセスする学生もいます。同じ場所で、同じ時の流れを共有しているわけではない画面越しの学生たちに、気持ちを込めた言葉がどれだけ伝わっているのか、手応えを感じるのはとても難しいことだと思いました。

教室で授業を行うことの意義を再確認

佐々木 私はオンライン授業になってはじめて、教員の板書が朝鮮語のハングルの正しい書き方を身に付けるうえで大きく貢献していたことに気付きました。板書をする、学生はノートに先生の文字をそのまま写し取りますが、それには大きな学習効果があるのだと改めて思いました。これは朝鮮語の特殊事情ですが、パソコンの画面に表示される文字が、フォントの種類によって正しく見えない場合があります。手書きで書く文字と画面に表示される文字の違いが、初学者には見分けがつかないのです。

教室での授業なら教員の板書から正しい文字の形を学べますし、学生が間違った文字を書いていれば教員がその場で指摘して正すことができます。そのせいか、教室で行う授業では間違った文字を書く学生はあまりいません。しかし今回のオンライン授業では間違った文字を書く学生が多発しました。そこで、課題の添削時にタッチペン等で直接ハングルを書き、かつ正しい文字について解説を加えるなどして対応しました。

しかし、せっかくレスポンスをしてもしっかりと見ない学生もいます。授業中にしつこく言えば覚える率が高まりますが、Blackboard にアップしても他のコメントに埋もれてしまい、それがどれだけ重要かが学生には伝わりませんでした。また、見たとしても記憶に残りにくいようで、同じミスを繰り返してしまいます。

松本 スペイン語のアクセントマークは右上から左下に向かって打たないといけないのですが、それを伝えるのが難しかったですね。最近のパソコンやスマホは性能がいいので、母音を打つとアクセントマークのパターンがたくさん出てきて、簡単に入力できるようになっています。その入力方法も教えました、何度言っても逆向きにつけてしまう人がいました。板書なら、先生が文字を書いている様子を見てそれを真似しながらノートに書き写すことで覚えていきますが、オンラインでそれをするのは難しいですね。

ただスペイン語の先生の中には、ご自宅にホワイトボードを買ってきてそこに板書をしながら教室と同じように授業をしている方が数人いらしたので、その方法ならばこのような問題は回避できたのかなと思いました。

森平 中国語の漢字をパソコン等で入力する場合、「ピンイン」と呼ばれるラテン文字化した表記法で変換します。教室でこのピンインによる漢字変換の方法をどのようにト

レーニングするかは、私の中では大きな課題でした。今回は学生にチャットを通じて文章を作成し発表してもらうことで、授業内でピンインによる漢字変換をトレーニングする機会が増えました。そうした入力方法は、今後中国語を活用していくうえでも必要なもので、今回は効率よく教えることができてよかったと思っています。

サンブソン 対面授業だと、クラス全体の雰囲気や学生一人一人の様子がひと目でわかりますが、オンラインでは全体の様子は見えません。

教室でグループワークしているときに、他のグループが頑張ってるたくさん話しているのを見れば「私たちもたくさん話そう！」となって教室全体がいい雰囲気になることがあります。でもオンラインだと、他のグループの様子が一切分からないのでそうしたことも起きません。

教室全体を俯瞰的に見るのがいかに大切なことだったかについて、オンライン授業になってから改めて気付きました。

佐々木 おっしゃるようにオンラインでは全体の様子が俯瞰的に見えません。参加者の人数が多くなると、スクロールしないと全員の顔が見えないこともあり全体に目が届きにくいと思います。グループワークをする際も、オンラインでのブレイクアウトルーム中は、他のグループの動向は完全に見えない状態です。

一方で、中級以上のレベルで基礎がしっかりできている学生を少人数教えるなら、オンライン空間の雰囲気は適しているように思いました。オンラインだと学生が意見を言いやすいとか、課題をちゃんとやってくれるというプラスの側面もあるようです。参加する人数と、参加する学生の意欲によってはオンラインを効果的に活用できるかもしれないと感じました。

松本 私もオンラインが活かせるかどうかは、参加する学生のレベルや意欲が関係してくると思っています。

以前上級レベルの少人数クラスで、難しめの文章をその場でスペイン語に口頭で訳してもらうというアクティビティをやったことがありました。当てられた学生が答えていくのですが、オンラインだと当たっていない学生たちもマイクがミュートなので答えていたのです。声が聞こえなければ回答者の邪魔をすることなく練習ができます。クラスの人数が10人なら、本来なら答えるチャンスは10分の1しかないけれど、オンラインなら10回すべて自分に当てられたつもりで授業に参加することもできるのです。そうした意欲のある学生にとってはオンライン授業もいいなと思います。

森平 私は今回経験したオンライン授業では、対面で行う授業以上に、学生のコメントも活発、発音も積極的で、教室内の空気に左右されずに授業が進められたことに利点を感じています。

中国語の場合、恥ずかしがって口をもごもごしては正しい発音ができません。し



佐々木 正徳

かし教室内では周囲の視線を意識してしまい、発音はもごもごし、声量も小さくなりがちです。発音だけでなく、授業内での発言も遠慮がちになります。それがオンラインでしかも顔を見せない場合、周囲の視線を意識することがない分、発音や発言は堂々とできます。Zoomを音声だけオンにして使うことは、恥ずかしがり屋の日本人にとっては、ある意味とて素晴らしいシステムだと思います。また、グループワークやペアワークを行う際は対面だと学生が移動する時間や組み合わせ方を指導する時間がかかりますが、オンラインではZoomのブレイクアウトルーム機能を使えば、瞬時にグループ分けができますし、メンバーを変えるのも簡単です。

オンラインのいいところは、学生が質問や意見を言いやすいところにもあると思います。対面授業だと学生はなかなか質問をしてくれず、授業が終わったあとにこっそり質問しにくる学生もいました。でもオンライン授業では、チャット機能を使ってどんどん質問をしてくれます。それも全員宛てではなく「私宛てにプライベートで送ってください」と伝えた場合はよりたくさんの質問が寄せられます。そうした質問に対する返答を授業内で共有すれば、同じ疑問を抱えていた学生にも有効です。

オンライン授業を効果的に行う方法を模索して

関 文法など基礎的な学習をする際には、間違えたところを重点的に何度も繰り返し解くことができるAIのシステムを使うのは、とても効果的だと思います。少し前に、個人的にeラーニングの仏検対策教材を作ったことがありましたが、そのとき関係者から「今の学生はスマホを使ってパパッと問題を解く形のほうが楽しいし、覚えやすいようです」とお聞きました。確かに基礎的な文法などは、スマホで同じ問題を繰り返し解くほうが効率がいいのかもしれませんが。

松本 授業の時間以外でも、オンラインを使って個々人が学べるシステムが活用できたらいいですね。1年間で覚えてほしい単語があったら、それに関する問題作り、出題形式を工夫すれば、何年か運用できるのではないかと考えます。授業と直接連携がなくても、行うべき課題をオンライン上にあげておいて、学生が自分のペースでどんどん進めていけるシステムがあるといいと思います。

森平 私は、今後はオンデマンドをうまく活用できればとも考えています。発音や文法の説明などはオンデマンドで提供できれば、授業内での説明の重複が避けられますし、説明中心、座学中心の授業内容が変更できる可能性も出てきます。授業中に流れていく情報をその場で消化しきれない学生もいるので、授業の難しいところを一部分でもオンデマンドにして、繰り返し見て覚えるというやり方もできます。

関 もう一つ、オンラインのメリットはイベントに参加しやすいということもあると思います。言語Bでは、継続学習を推進するための連続企画として、数年前から「世界を知ろう!」という学内向けの映画上映会などのイベントを開催しています。これまでは対面型で行ってきましたが、春学期に初のオンラインでのライブ配信型講演会を行い

ました。これまでは50人参加すればいいほうでしたが、今回は76名もの学生・教職員の参加がありました。オンラインということで参加しやすい環境だったのだと思います。

オンラインでのイベントは場所に縛られずに参加できるのがいいところだと思います。池袋・新座の両キャンパスの学生が同時に授業を受けることができるのも、物理的制約の少ないオンラインならではのですね。

森平 2年次生以上が履修する中国語の自由科目の授業内で、12月に中国の学生とオンラインで交流会をしました。これは現地に行かなくても交流できるというオンラインならではの企画で、予想以上に活発な交流ができ、今後も継続したいと思っています。

関 海外とリアルタイムでつながるといってオンラインを生かすことができれば、学びの可能性はもっと広がると思います。とくにフランスは遠い国なので、直接行くのは普通の状況であっても大変なことです。オンラインは時差の問題がありますが、フランス語はフランスだけではなく五大大陸で話されているので、時間に合わせていろいろな国の人たちと交流ができると思います。



関 未玲

フランス語を学習するということは、フランス語の文法を覚えて「ボンジュール」と言えるようになるればいい、というものではありません。日本と異なる文化圏であるフランスと、フランス語を話す世界五大大陸の国々の人々の「今」を感じ、互いに情報を共有して、いち早く世界の向かう方向へと目を向けるための心の準備を促すことが、とりわけフランス語のような第二外国語教育にとっては重要だと考えています。このコロナ禍においても、日本とフランスとの関係は動いています。未来を見据えるために情報量が多いに越したことはありませんが、その情報がステレオタイプであったり偏っていたりしていると、かえって視界が狭くなってしまわないでしょうか。フランス語圏の遠い国々の情報と、文化と「今」に対してアンテナを高くはる学生が1人でも増えるよう、自分自身も広い視野を持って「旬」を見出し続ける努力を怠らないようにしていきたいですね。

失ってはじめて気付く大学授業の付加価値 今後の言語教育やオンライン授業への思い

関 オンライン授業になったことで、授業が予定通りに進み、いつもなら終わらない教科書が全部終わるといのは素晴らしい反面、自分の授業について振り返ってみると、教室での授業では予定不調和な出来事を期待していた部分があったのだと改めて感じました。

例えば、思ってもいないような質問を学生がしたり、授業中に外から音楽が聞こえて

きたり……そうした予想外の出来事と自分のフランス語教育が連鎖して、授業が毎回改変していくというのでしょうか。その予定不調和によって、思わぬ方向に授業が進むことで、気付かぬうちにマイナーチェンジを重ね、積み上げていくことができましたが、予定調和に進むオンライン授業だとそうしたことがあまりないので、何か新鮮味が失われていくように感じました。とりわけ週に2回担当しているクラスで、オンライン授業を刷新し続けることの難しさを痛感しました。

また、学生がカメラをオフにしている黒いスクリーンに向かい話し続けていると、言葉の「重み」が失われてゆくような感覚を体感しました。まるで言葉を発すると同時に、そこに込めた思いが瞬時に冷めて半減していくような感覚で、まだまだ教員として未熟だと痛感した瞬間でもありました。

佐々木 私も関先生と少し似たようなことを感じました。大学の授業というのは、いわゆる想定した授業時間数があり、それに基づいて単位時間が決められ、学習の目標が設定されて、そこに到達することを目指します。その部分だけを見れば、おそらく多くの授業がオンラインでも目標を達成していると思います。それならば、教員や学生も満足して不満も出てこないのではと思いますが、実際にはそうではありませんでした。となると、大学の授業の意義というのは、授業というコンテンツにいかにつ加価値がついているか、というところにあるのではないかと思うのです。それは学生によっては友人との出会いかもしれないし、授業の合間に挟む外国語あるあるネタだったりするかもしれませんが。プレミア感と言った方がよいかもしれませんが、そうした想定外に付随してくるものについて、教員も学生も意外に価値を見出していたのではないかなと。今までは当たり前のように与えられてきたものなので意識はしなかったけれど、失ってみてはじめて気付いたということかもしれません。

とにかく、2020年度は教員も学生も「大学の授業の意義とは何か」についてよく考えた1年だったと思います。よりよい教育という観点から、オンラインか対面かという視点だけではなく、多様な授業形態が検討され、大学教育が変わるきっかけになればいいと思っています。

森平 この1年間のオンライン授業経験を、一過性のものとせず、今後の言語教育にもぜひ活用していきたいですね。



坂本 真一

坂本 私は、ペアワークやグループワークは、語学教育においてとても重要だと考えているので、今後もオンライン授業の中でもうまく取り入れていきたいです。単語や表現のレベルでも「自分は知らなかったけれどあの人は知っていたんだ」などと他の人の発言によって刺激され、学びの相乗効果が生まれることが、多人数で学ぶことの一つの利点だと思うのです。学ぶ内容にしても、モチベーションにしても、いろいろな側面で協働学習の効果は大きいものです。

オンライン授業は場所を問わずに参加できるというのも大きな利点です。予定を組むときに、この時間帯は対面では無理だけれど、オンラインだったら参加できるという場合もあります。オンライン授業にはそうした利点があるので、言語学習を継続する学生たちも今後増えてくるのではないかと期待しています。オンライン授業のニーズはますます高まるでしょうから、オンライン授業も対面授業とともに、今後しっかりと展開していく必要があると感じています。

サンプソン 今年度のオンライン授業の経験を受け、これからもオンライン授業をどのようにより効果的に活用できるか検討する必要があると思います。2020年度は、言語学習にはまず「人間味」が大切であるということを再認識した年でもありましたので、言語教育を通して、学生一人ひとりが「自分」を出せるようなカリキュラムや環境を同僚と一緒に作っていききたいですね。

関 2020年度は本当にいろいろあったので、もしも来年度対面に戻ったら気持ちも新たに、情熱を持って取り組めるのではないかと考えています。オンライン授業を経験したために、対面のありがたみを感じているところです。

自分自身がまだオンラインを駆使するレベルに至っていないからだと思いますが、対面型の授業に夢を見ているというか、期待している部分があります。やはりオンラインも対面もそれぞれいいところと悪いところがあるので、両者をうまく見定め、オンライン授業の利点は活用し、そうでない面は対面を最大限生かすことができるといいのではないかと思います。

松本 今、言語教育が大きく進化する段階に差し掛かっていると感じています。オンライン授業を体験してみて、今まで対面授業のみでは思いもつかなかった学習方法や授業運営方法があることにも気付きました。とくに今、そしてこれからの大学生は、さまざまなことをオンラインで行うことに慣れ親しんでいる世代ですから、今後もオンラインの利点をどんどん生かしていきたいと思っています。